

エルサルバドル 2010年 —『エルサルバドルを知るための55章』刊行によせて—

田 中 高

はじめに

本稿では前半でフネス政権を取り巻く最近の動きを簡単に解説した後、少し視点を変えて、後半では日本とエルサルバドルの交流史などについて、最近刊行された『エルサルバドルを知るための55章(以下55章と略)』(細野昭雄・田中高編、明石書店 2010年)を基にしながら、紹介することにしたい。

エルサルバドルでは2009年6月、マウリシオ・フネス大統領を首班とする左派政権がスタートした。与党となったファラブンド・マルティ民族解放戦線(FMLN)は、1970年代は武装闘争による政権の奪取を目指し、一時は国内の機能をほぼ麻痺させるくらいの攻勢を誇った。この間、米国レーガン政権は多額の軍事援助を拠出して、政府軍はようやく内戦を持ちこたえた。

92年に念願の和平合意が成立し、これまでの「銃による戦い」から、「投票箱の戦い」に、政治のルールが大きく転換した。89年から09年まで、従来は保守層の利益を代表してきた国民共和党(ARENA)が連続して政権を握った。こうした意味でも、09年のフネス政権の発足は、エルサルバドル政治史に画期的な変化をもたらせるものであった。さらに、近年ラテンアメリカで台頭しつつある左派政権(詳しくは渥野井茂雄・宇佐見耕一編『21世紀ラテンアメリカの左派政権—虚像と実像』、アジア経済研究所 2008年)

の動向を見ていく上でも参考になろう。

(1) 穏健左派路線のフネス大統領

まず強調したいことは、当初懸念されていたフネス政権の急速な左傾化という現象は今のところ見られない、ということである。大統領はむしろ、サルバドル・サンチェス・セレン副大統領を中心とする、党古参のマルクス・レーニン主義を標榜する強硬路線のグループの動きをたくみに抑えている。その好例が、前政権時代から受け継いだ、良好な対米関係を維持していることであろう。

もともとフネス氏はジャーナリスト出身で、政治の世界での経験はほとんどなかった。さらに大統領夫人であるバンダ・ピニヤト氏がブラジル出身で、ブラジル労働党(PT)の創立者の一人であり、ルーラ大統領の側近でもあった。この関係でルーラ大統領の「穏健な社会主義」路線に思想的に近づいたのではないと思われる(この間の詳しい経緯については、『55章』所収の細野昭雄、ソニア・フィカ 第24章「活躍する女性たち」を参照されたい)。

新政権発足後の政治上の大きな出来事は、20年間与党の地位にあったARENAが分裂したことであろう。こともあろうにサカ前大統領が、党首でもあるクリスティアーニ元大統領に反旗を翻したのである。

ARENAのこれまでの結局からは想像もで

きないことだったが、09年10月、12人の国会議員が同党を離脱し、新党国民統一党（GANA）を結成した。その前兆となったのは、高い支持率を誇りながら退任した、同党的サカ前大統領とクリスティアーニ ARENA 総裁の確執であった。筆者はたまたま09年8月首都サンサルバドルで、この二人と別々にインタビューする機会があり、ARENA の党再建や政局の見通しなどの意見交換をした直後であった。その時の二人の口調から、党的分裂が起きるような兆候は見られなかった（詳細は拙稿「エルサルバドルー2009年」『ラテンアメリカ・レポート』 第26巻第2号 2009年）。政治の世界の難しさを垣間見る思いである。

GANAの誕生はフネス大統領にとっては、国会運営上プラスになったようで、国家予算などの承認のための審議で、GANAとの連携が進んでいる。エルサルバドルの国会は一院制で議席総数は84である。そのうち与党 FMLNは35議席。GANAは14席。保守政党国民融和党（PCN）は10議席である。この三党を合計すると59議席で、議員定数の3分の2を超えることになる。最大野党はARENAで18議席である。

フネス大統領は重要な法案（たとえば国際機関や外国政府との借款の取り決め）の際にFMLNよりもむしろGANAの支持を当てにしているという分析もある。なお今年5月にはマヌエル・セビジャ農業牧畜大臣が、フネス大統領の政権運営に反対して辞任するという出来事もあった。政局運営全般では、フネス大統領は巧みな手綱さばきを続けていて、国民の人気も依然として高い。10年1月に開催された、和平合意後18周年の記念式典では、同大統領は「エルサルバドル政府の名において、残虐な戦争の犠牲者となつた方々に、許しを請いたい」と述べ、さらに、

和平合意で約束されている戦争犠牲者への賠償について、「履行したい」と明言している。

外交分野でも、フネス政権は現実的な政策をとり続けている。キューバとの国交を再開はしたが、ベネズエラがリードするALBA（ボリバル代替構想）などの地域統合の動きには距離を置き参加していない。本年3月には大統領として初めてのワシントンDCを訪問したが、会談で話し合われた内容は、貿易、麻薬、在米エルサルバドル人の在留資格問題など、極めて実際的な項目に限られている。左派政権にありがちな、新自由主義経済やアメリカの対中南米政策への批判などを言葉にすることはほとんどない。

このような比較的安定したエルサルバドルの国内政治のありようは、隣国ニカラグアの第二期オルテガ政権がベネズエラ・キューバとの外交関係を深めていることとは対照的であるし、昨年から今年にかけて国際的にも関心を呼んだ、ホンジュラスの内紛騒ぎとも無縁である。おそらくその要因の一つは、エルサルバドル人の歴史的に醸成された国民性のようなものにも起因しているのではないかであろうか。こうした疑問に答える意味でも、『55章』は参考になるのではないかと思う。そこで以下そのエッセンスを紹介したい。

（2）『55章』について

本書は03年から07年にわたりエルサルバドル大使を務められた細野昭雄氏（現政策研究大学院客員教授）が中心となって編纂したものである。おそらくエルサルバドルを理解するうえで欠かせない、貴重な文献であると思われる。というのも、もともと日本語で書かれた中米諸国についての書籍が非常に少ないに違いない。本書にはエルサルバドルと深い縁のある18名のベテランの執筆者が参加し、この国の歴史、文化、政治経済、日本とのか

かわりについて、網羅的にカバーしているからである。

日本を代表する開発経済学者である細野氏が、大使という重責を果たされながら、学術研究と途上国の現場での経験を縦横無尽に開陳されているのが、本書の骨格となっている。その一例として、エルサルバドルの東部地域開発についての詳細な記述がある(第6章「東部地域開発とドライキャナル」)。日本政府が協力して推進した、東部のラ・ウニオン港の開発モデルは、細野大使が、JETRO(日本貿易振興機構)出身の前任の湯沢三郎大使の路線を踏襲しつつ、それを拡充し陣頭指揮して推進した。これは単なる港の拡張と整備というインフラ建設ではなく、周辺の道路、人材育成のための教育機関の設置、中央と地方の行政組織の効率化、農・水産業の振興を含む、文字通り地域の総合的な開発プロジェクトである。また隣国ホンジュラスとの間に「日本・中米友好橋」を架橋することで、カリブ海と太平洋を結ぶ「ドライキャナル」の縦貫も計画されているのである。

さらに折しもサカ前大統領からフネス現大統領へと、エルサルバドルの政治情勢が大きく変動する現場に身を置かれた経験を生かして、両政権の主要なメンバーについて、生き生きとした情報を提供されている(第1章「マウリシオ・フネス大統領の誕生」、第2章「フネス政権を支える人々」、第24章「活躍する女性達」など)。

大使館に勤務されていた塚本剛志さんは、日本との経済協力の具体的な案件について、紹介されている。その一つは地震国エルサルバドルで、耐震機能を備えた低所得者向けの住宅建設のプロジェクトがある(第26章「自然災害への支援」)。エルサルバドルの水産開発に携われた経験のある木谷浩さんは、貝についての興味深い話を寄稿された(第36章

「貝の国」)。専門調査員として大使館に勤務し、現在は大学院で研究活動をなさっている笛田千容さんは、エルサルバドルの企業家についての綿密な論考を出された。日本ではあまり知られていない感染症であるシャーガス病については、狐崎知己さんが詳細に報告された。狐崎さんは現地のテレビ番組(カナル10)にも出演され、日本のシャーガス病対策への協力について発言された。小澤卓也さんは第44章の「エルサルバドルの先住民」で、ピピル族とシピティオ伝説を紹介し、同国のテレビ番組でも広く知られている風変わりな伝説上の主人公について説明された。日本でピピル語の研究をなさっている数少ない研究者の一人である敦賀公子さんは、ピピル語の現地調査を踏まえた成果を詳述された(第45章「ピピル語」)。

94年に日本がPKO法に基づいて派遣した選挙監視団の報告と、09年の大統領選挙の選挙監視員の現場の様子については、それぞれ浦部浩之、中川智彦のお二人から原稿を頂戴した(第17章「1994年選挙と日本のPKO参加」、第19章「2009年大統領選挙監視員」)。世界中で愛読されている『星の王子様』の作者、サン=テグジュペリ夫人のコンスエロとエルサルバドルの絆については、平尾行隆さんが熱心に取り組んでおられるテーマである(第41章「『星の王子様』の故郷」)。

(3) ベネケ大使と日本の関わり

日本が中南米で最初に青年海外協力隊の派遣取り決めを結んだのはエルサルバドルである。きっかけとなったのは、大の親日家のワルテル・ベネケ教育大臣(駐日大使を歴任)の熱心な働きかけであった。体育教員養成学校、国立芸術高等学校への協力隊員の派遣は、現地でも高く評価された。その立ち上げ

から現場で直接携わってこられた望月久さんは、文字通り歴史の証人としての記録を寄稿された（第49章「青年海外協力隊」）。

歴史の証人ということで本書の特色の一つとなるのは、鈴木孝和さんの手による第52章「インシンカ事件の背景」であろう。鈴木さんはあの忌まわしいインシンカ事件で渦中の人となり、114日間に及ぶ拘束生活を余儀なくされ、長い間沈黙を守ってこられた。本書ではゲリラに誘拐されてから釈放されるまでの間の出来事について、冷静なタッチで淡々と語られている。残念なことに、本書の刊行を見届けることなく、09年逝去された。この場をお借りしてご冥福をお祈り申し上げたい。

先述のベネケ大使の発案で、60年代から大学生が中心となり、エルサルバドルをはじめとする中米への親善訪問が活発に行われた。その初期の訪問団に参加された際の、現地体験の様子を設楽知靖さんが報告して下さった（第48章「学生中米親善見学団」）。日本とエルサルバドル、さらには中米諸国との交流に、ベネケ大使の果たした役割には計り知れないものがある。おそらくそのベネケ大使をもっともよく知る日本人の一人は、川島良彰氏であろう。川島さんは70年代後半から80年にかけて、内戦中のエルサルバドルで、世界でも屈指の研究水準を誇る国立コーヒー研究所で勉強された。そのきっかけとなったのが、東京におけるベネケ大使との邂逅であった。ベネケさんが80年4月、何者かによって暗殺されるという悲痛な事件が起きた。その後に、「虫のしらせ」で大使の自宅を訪問されるという稀有な体験を語ってくださっている（第50章「ワルテル・ベネケ」）。

ベネケ大使の功績の一つは、日本のNHK教育テレビからヒントを得て設立した、国営教育文化テレビ局（カナル10）であろう。

カナル10は現在もメディア教育の中心的な役割を担っている。また日本政府も継続して、文化無償などで資金協力し、同テレビ局の運営に側面支援している。『プロジェクトX』と題するシリーズ番組を制作し、たとえば円借款で建設したエルサルバドルの新国際空港（コマラバ空港）の、想像を絶する困難な環境での工事の様子などを、当時の映像や関係者へのインタビューを交えて紹介した（細野昭雄 第5章「エルサルバドル国際空港」、塚本剛志 第28章「国営教育文化テレビ局」）。

カナル10については、メディア教育の有効性を実践している例として、国際的にもその役割が再評価されている（Lindo-Fuentes, Héctor, "Educational Television in El Salvador and Modernisation", *Journal of Latin American Studies*, Vol.41, 2009）。右論文では、「カナル10の構想は、当時日本大使を歴任した、カリスマあふれるベネケ教育大臣の発案によるものである。彼はNHKを賛美していた。」（772ページ）と論述している。

以上述べたように、本書の特色の一つは、日本とエルサルバドルの友好に多大の功績を残し、50歳の誕生日を迎える直前、凶弾の前に倒れたワルター・ベネケ大使の人と業績を、少しでも世に伝えていることであろう（ベネケ氏の戯曲2編も併せて紹介した。拙稿コラム「ワルテル・ベネケ作 戯曲『臆病者の天国』、『葬儀屋』」）。

本書は経済学者としてまた外交官として、エルサルバドルと日本の交流に大きく貢献された細野昭雄氏の編集されたユニークな文献であり、一人でも多くの読者の手に触れることを願っている。

（たなか・たかし 中部大学教授、
ハバナ大学キューバ経済研究所客員研究員）